

＜研究ノート＞

スミス価値論の再検討—カルロ・ベ ネッティのスミス解釈

海老塚 明

序 カルロ・ベネッティの問題構制

スミス『国富論』が経済理論の歴史における古典中の古典であるのは、それが経済理論の最初の体系的著作であるという単なる事実によるだけではなく、それが経済についての言説を経済学たらしめる体系構成原理としての価値論を定礎している点にある。この点で、現代経済学もスミス理論の射程内にあると言えよう。マルクス経済学であれ新古典派経済学であれ各経済学説が自己の出生証明を『国富論』に求め、それからの距離によって自己の経済学体系の完成度の高さを誇ろうとするのもここに由来している。そうだとすれば、経済学の「反省」が要請されている現代にあっては、あらゆる経済学説の原点としてのスミス価値論の再検討が重要な課題とならざるをえない。本稿で紹介・検討しようとする、カルロ・ベネッティ『スミス—商業社会の経済理論』(〔2〕)の問題意識もここにある。⁽¹⁾

価値の生産価格への転化問題についての論争を発端とする最近の価値論論争は、従来のマルクス価値論理解の根本的な再検討を要請しつつある。具体的に言うならば、マルクス価値論を「均衡価格の水準決定の問題に矮小化する」(雨宮〔1〕19頁)「投下労働」価値論＝リカードウ的マルクス解釈の批判、およびマルクス価値論の市場社会論的再構成が緊要な課題となっている。⁽²⁾ すなわち、超歴史的な実体としての抽象的労働なるものが予め存在し、それによって諸対象が交換以前に社会的なもの—社会総体の構成部分—とされるのが「投下労働」価値論だとすれば、上記の新たな潮流に属する論者達は、⁽³⁾「いかなる事前の結合も認められない分散化した(decentralized)経済」(ブルイ〔16〕p.40)＝市場経済においては、私的諸対象は交換を通して社会的なものとして承認され社会へと統合されるという点に着目することによって「投下労働」価値論を拒

否し、マルクス価値論の主題をこの市場経済の社会編成様式の解明に設定する。この潮流の論者の1人であるカルロ・ベネッティのスミス価値論に対する検討もこの視角から為されている。市場経済の理論としてのスミス価値論の検討、これがベネッティの問題視角である。

以下、本稿の構成について簡単に述べておこう。本書は次の9章から成っている。

- I 「実質価値の探究という経済学の目的の問題」
- II 「実質価値および所有者と商人の社会像」
- III 「交換関係と経済領域の社会関係からの自立化」
- IV 「価値と収入—資本主義的商品概念」
- V 「資本主義の市場概念—見えざる手」
- VI 「資本、生産的労働、利潤」
- VII 「貨幣概念」
- VIII 「所得分配」
- IX 「経済的進歩、自由主義と国家」

各章の標題からも判るように、本書は非常に包括的なスミス『国富論』研究の書である。しかし、紙幅の関係上その全てを紹介・検討することは到底不可能なので、本稿では、先のベネッティの問題視角がスミス研究に対して有する意味性を明らかにするという観点から、スミス価値論と「商業社会」の関係（第I節）、貨幣概念（第II節）についてのベネッティの解釈に的を絞って見て行くことにする。その際、①スミスにおける「投下労働」価値論と「支配労働」価値論の混在・混乱の指摘を通しての前者の理論的正当性の基礎づけ—スミスにおける「投下労働」価値論の存在を主張するにともなって、commercial society は「単純商品生産社会」として解釈される—、②スミス貨幣理論における価値形態論の欠如および貨幣の価値尺度機能の軽視に対する批判、この2点が日本におけるマルクス経済学サイドからのスミス経済理論研究の主要な2つの論点であることを念頭に置いておけば、ベネッティの解釈の独自性はより一層明らかになる。そして最後に、ベネッティのスミス価値論に対する問題視角が日本のスミス研究に対して有するインプリケーションを考えてみることにする（第III節）。

I。スミス価値論と「商業社会」

スミス価値論の検討に際して、ベネッティは次のように問題を設定している。経済理論に課せられている第1の課題は、交換における諸対象の等置関係を説明する—すなわち、いかなる側面において諸対象が「等しい」とされるのかを明らかにする—価値概念を作成し、それを基礎として諸対象が社会的に確定された量的規定を与えられ、そのようなものとして相互に比較可能な—通約可能な—社会的対象として社会へと統合されるシステム＝「同質空間 (*uno spazio omogeneo*)」を構築することだとされる。それではスミス価値論は、この課題を如何にして果たそうとしているのか、これがベネッティによって問題とされる点である。

「商業社会」の「富」を重商主義のように貨幣としての金銀にではなく、諸個人にとって直接的に意味のある「人間生活の必需品・便益品および娯楽品」〔〔12〕 p.30④ 150 頁〕＝「実質的富」に求めたスミスは、貨幣とは無関係に、「実質的富」を構成する諸対象を「所有することによってもたらされるところの、他の財貨に対する購買力」(同 p. 28④ 147 頁)、より根本的には他人の労働に対する購買力として価値を定義しようとする。すなわち、「富」から貨幣を排除し、貨幣価格という社会的—一般性という特質を捨て去ることによってスミスは、「実質的富」に対する購買力という個人的レベル—一方における諸個人と他方におけるその欲求対象の間の関係—を出発点に置いているのである。したがって、スミス価値論は、ことような特殊個別的な諸個人の差異性から出発して、諸個人および諸対象の社会関係と社会への統合の様式を明らかにするという課題を担っていると言える。

しかしながら、このような価値の定義は次のような問題を生じさせる。スミスは、各人が「交換することによって生活し、つまりある程度商人」になった社会＝commercial society における価値規定について次のように述べている。

「ある商品の価値は、それを所有してはいても自分自身で使用または消費しようとは思わず、それを他の諸商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しい。それゆえ、労働は、いっさいの商品の交換価値の実質的尺度なのである。」(同 p.30 ④ 150 頁)

この規定からするならば、各個人が交換によって得ようとするものは「自分が

必要とする」(同p.22① 133 頁)ものである。したがって、それはそれを欲する個人にとってだけ有意義な対象であり、このことはそれを生産する労働についても同様である。それゆえ、諸個人(そしてその欲求)が特殊個別的—そうでなければ、社会には唯一人の個人しか存在しないことになる—であるのに応じて、「その商品がその人に購買または支配させうる労働の量」によって規定される「交換価値」=「主観的交換価値 (*valore soggettivo di scambio*)」(〔2〕p.12)にすぎない。換言すれば、ここでは「諸個人の異質性が諸対象および諸対象を生産する労働量に移し換えられている」(同前)にすぎず、社会的、客観的な社会関係=「同質空間」は成立しえない。この結果、この「異質性」を「圧縮する (*sopprimere*)」プロセスが設定されなければならない。

ベネッティは、次のスミスの文言を手掛りとして議論を進める。

「貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得できるのとちょうど同じだけの労働によって購買されるのである。実に貨幣または財貨は、一定量の労働の価値をふくみ、われわれはそのとき、それらを等量の労働の価値をふくむと思われるものと交換するのである。」(〔12〕 p.30① 151 頁)

この文言をベネッティは、「市場において2つの対象は、等量の労働の価値を表現するものとして等価だと判断される」(〔2〕 p.12)という意味で理解する。つまり、ここでスミスは「主観的交換価値」概念に帰結する特殊個別的なものとしての諸個人の観点=「使用価値」(=「特定の対象の効用」)の観点を脱却し、市場取引の観点から分析を行なおうとしているものと解される。かくして、「交換価値は、対象自身ではなく、2つの労働量の価値の間の等価性として定義される」(同前)。そうすると、ここに2つの問題が生じてくる。①「主観的交換価値」の場合のように諸対象の「使用価値」が問題とならないとすれば、諸対象は如何なる側面において市場関係の中に置かれ、相互に関係づけられるのか、すなわち「諸対象は、いかなる側面において市場交換の中で等置されるのか」(同前)、②交換価値は、2つの労働量の価値の等価性によって定義されるのであるから、後者は前者とは独立に決定されなければならない。それでは、如何にして労働の価値は定義されるのであろうか。

①の問題から見ていこう。スミスは、「財産」の所有がその所有者にもたらす「力 (power)」を「購買力、すなわち、そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配である」とし、「財

産」の大小はこの「力」の大小に比例するとともに、「交換価値」もこの「力」の大きさに比例するとしている（〔12〕 p.31④ 152 頁）。ベネッティは、この点に着目して、「他人の労働に対する支配力」こそは「商業社会」において根本的なものとして理解されなければならないとする（〔2〕 p.14）。すなわち、使用価値ではなく、その対象の有する「交換価値」＝「他人の労働に対する支配力」—この大きさが「財産」の大小を決定する—が自己目的化し、この「力」を求めて諸対象が欲せられ、等置され、交換が行なわれる社会が「商業社会」だということである。この意味で、スミス価値論は「支配労働」価値論に外ならないとされる。そして、そのようなものとして、スミスの言う「商業社会」は商品交換を通して形成される「他人の労働に対する支配力のネットワーク（*una rete di potere sul lavoro altrui*）」（同様）であり、しかもそこでは「他人の労働に対する支配力」はその対象の「所有」によってもたらされるが故に、「商業社会」の根本的なカテゴリーは「労働」よりもむしろ「所有」であるとベネッティは結論づける（同p.18）。

②の問題について。スミス価値論の中にいわゆる「投下労働」価値論を見ようとする立場から、スミスが「労働の価値」と「労働量」を混同しているという批判が為されてきた。しかし、スミスの「支配労働」価値論の立場に立てば、諸対象がふくむ労働とは、諸対象が交換を通して支配する他人の労働に外ならない。そして、労働もこのように交換関係に置かれるものとしては「価値」を有することになる。そうすると、「労働の価値」は「労働力の価値」の不正確な表現であるという批判が生じてくる可能性がある。だが、ここで問題なのは労働の量であって労働力商品の価値ではないこと、そしてこの段階では賃銀概念が導入されてはいないことを勘案すれば、このような批判は妥当ではないと思われる。それでは、スミスはどのようにして「労働の価値」を定義しているのだろうか。スミスは言う。労働者は労働することによって「自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない」が故に、「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である」（〔12〕 p.33④ 155-156 頁）。「労働の価値」は労働の「労苦や煩勞」と等置されていると言えよう。スミスは、このような形で「労働の価値」を交換関係の外部から与え、そうすることによってその不変性を主張している訳である。

このようにして定義される「労働の価値」による商品価値の規定について、スミスは次のように述べている。

「それを獲得して売りさばいたり、他の物と交換したりしようと欲する人にとって、あらゆる物が現実にとれほどの値があるかといえ、それはこの物がその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり、またこの物が他の人々に課しうる労苦や煩勞である。」（〔12〕 p.30④ 151 頁）

「支配労働」価値論の観点からすれば、ある「物」の価値が表現するのは、その「物」の生産に必要な「労苦や煩勞」ではありえないから、「他の人々に課」すことによって「節約」される「労苦や煩勞」である外はない。ここからベネッティは、スミスの「商業社会」の中には、他人に労働を課すことによって労働を節約する社会的人物＝所有者が、そしてその対極には課された労働に服する労働者が存在するということを導出する。もちろん、経済的实践においては両者は同一人物でありうる。しかし、ある「物」の価値がその所有者の労働の「労苦と煩勞」を表わさない以上、所有者が同時に労働者であるという必然性は与えられていないのであって、理論上では両者は区別されなければならないということになる。そしてまた、このような区別は、所有こそが中心のカテゴリーである「他人の労働に対する支配力のネットワーク」としての「商業社会」概念と整合的だとされる。資本―賃労働関係をも包含するより一般的かつ抽象的なこの区別の故に、スミスの言う commercial society は、通常考えられているような「単純商品生産社会」ではなく、『国富論』第1編第1―3章で展開されている分業論と資本主義概念を媒介する「論理的契機（*un momento logico*）」（〔2〕 p.18）⁽⁵⁾⁽⁶⁾であるとベネッティは論定する。

それでは、ベネッティはスミス価値論の問題点をどこに見い出しているのだろうか。彼は「商業社会」におけるスミスの「支配労働」価値論を次のように一般的な形で図式化する。

$$(1) \quad V(Q_1) = V(Q_2)$$

$$(2) \quad \downarrow \uparrow \quad \downarrow \uparrow$$

$$(3) \quad V(L_i) = V(L_j)$$

（ここで $V(Q_1)$ 、 $V(Q_2)$ は、商品1と2の一定量 Q_1 、 Q_2 の価値を、 $V(L_i)$ と $V(L_j)$ は、それぞれ Q_1 と Q_2 によって購買される労働量 L_i と L_j の価値を示している。）スミスによれば、等価関係(1)は等価関係(3)によって説明される。問

題は、関係(2)をどう理解するかということである。スミスの「支配労働」価値概念からすれば、 Q_1 が L_i に対する購買力を有し、その結果 $V(L_i)$ によって $V(Q_1)$ が規定されるということになる。しかし、スミスの先の定義によれば、購買力とは価値のことであるから、 $V(Q_1)$ の存在が前提されていなければならない。しかも、 $V(L_i)$ が労働 L_i の「労苦や煩勞」を表わしているのだから、 $V(Q_1)$ も労働の「労苦や煩勞」を表わしていることになる。しかし、 $V(Q_1)$ は他人に課すことによって節約される「労苦や煩勞」を表わすから、 $V(Q_1)$ は $V(L_i)$ に等しいものとして前提されることになる。このことは、交換関係という社会的プロセスを通すことなく諸対象の価値が確定していなければならないということを、したがって諸対象は交換に先立ってア・プリオリに通約可能であるということの意味する。かくして、「支配労働」の概念に基づくスミス価値論の展開は、全ての対象が貨幣的性格を有することになるという点で、市場経済ではなく物々交換経済に帰着することになる。

以上がスミス価値論および「商業社会」概念についてのベネッティの解釈である。一般にスミスの「投下労働」価値論とされているものは、人間と自然との物質代謝—「本源的な購買貨幣」としての労働([12] p.30④ 150頁)—を示すものにすぎないこと、そして商品の価値は社会関係を示す概念であることを考えれば、従来「投下労働」価値論の見地から理解されていた commercial society 概念を「支配労働」価値論の立場から再把握し、その意味を明らかにする必要があると思われる。この点で、ベネッティの解釈は1つの先駆的試論としての意義を有していると思われる。⁽⁸⁾

II. スミスの貨幣概念

スミス価値論は、「商業社会」の「富」を重商主義のように貨幣としての金銀によって示されるものとしてではなく、「諸個人にとって直接的に意味のある自然的対象性を与えられた富」([2] p.5) = 「実質的富」として概念化しようとする最初の試みとして理解される。それ故、価値概念も、そしてそれによって規定される商品概念も貨幣概念とは無関係に与えられる。しかし、スミス価値論の展開は、結局全ての商品がア・プリオリに通約可能であるという意味で物々交換経済に帰着する。次なる課題は、物々交換経済から貨幣経済へ移行することである。ところで、このように貨幣の存在を前提することなく作成

された価値概念、商品概念を出発点として市場経済の理論を組み立てようとするスミス価値論は、根元的なカテゴリーである価値概念に基づいて貨幣を規定し貨幣を価値論の中に統合することによってのみ貨幣が本質的な役割を果たす市場経済の理論としての可能性が与えられるであろう。このことは、貨幣が商品として規定されなければならないということの意味する。特殊な商品としての貨幣、これがスミス価値論が要請する貨幣の規定である。このことは、貨幣の価格の規定を中心的な問題とすることになる。何故なら、スミスにあっては、商品概念を規定する価値は購買力のことを意味し、この購買力は価格において示されるからである。

スミスは、商品価格の決定メカニズムを『国富論』第1編第7章「諸商品の自然価格および市場価格について」で展開している。ベネッティは、このスミスの議論を定式化し、それを貨幣に適用することによって上記の問題を考察している。

この章でスミスは、「賃銀・利潤および地代の自然率」の存在を前提とし、それによって規定される商品の価格を自然価格(P_i^n)と呼ぶ。そして、その「商品の自然価格をよろこんで支払う人々の需要」を有効需要(D_i^e)= $P_i^n \cdot Q_i^n$ —ここで Q_i^n は、不変と仮定された需要される商品数量である—と呼び、これとその商品が実際に「市場にもたらされる量」(Q_i^m)との比率によって市場価格(P_i^m)が決定されるとする。つまり、 $Q_i^n \cdot P_i^n = D_i^e = Q_i^m \cdot P_i^m$ から P_i^m が決定され、 P_i^n と P_i^m の差によって生じる市場利潤率の不均等に基づく資本移動によって P_i^m が P_i^n に収束するとされているとベネッティは考える。⁽⁹⁾ところが、スミスは、貨幣としての金銀の「実質価格」は市場にある金銀の数量と商品の数量によって決定されるとしている([12] p. 188②97頁)。したがって、貨幣としての金銀は市場の外部で決定され、市場に対して前提されるところの自然価格を、そして市場価格は自然価格を前提にして決定される以上市場価格を有していないことになる。かくしてベネッティは、貨幣には自然価格と市場価格というタームでの商品価格の一般的分析が適用されず、貨幣の価格は不確定のままであるとする。そして、『国富論』第2編第3章でスミスが、貨幣は社会の収入の構成部分ではないとして—このことは、スミスにあっては収入が交換価値に等置されている以上、⁽¹⁰⁾貨幣は交換価値を有さず、したがって商品ではない⁽¹¹⁾ということになる—、貨幣を商品世界から排除することになるのも、この貨幣

の価格の不確定性の結果だとされる。

以上の検討を踏まえてベネッティは次のように結論する。「スミスにおいては、貨幣は経済的に不確定だという意味で不在である」(〔2〕 p.153)。つまり、スミス価値論からすれば、貨幣は商品として規定されなければならないのであるから、そのように規定しえないということは、スミス価値論の中には貨幣が理論的には存在しないということになる。結局、スミス「貨幣理論の帰結は、その出発点そのものである」(同p.152)物々交換経済だということである。

日本におけるスミス貨幣論の研究は、スミス『国富論』における価値形態論の欠如とその結果としての貨幣の価値尺度機能の軽視―流通手段としての貨幣理解―の批判を中心にして行なわれてきたと言えよう。⁽¹²⁾その際、マルクス価値形態論は、貨幣が商品であるということを前提にした上で、「如何にして」商品が貨幣であるのかを解明する理論だと通常扱われている。一般に、貨幣概念の定立に先立って価値概念、商品概念を与える価値論の立場からすれば、貨幣＝商品説は自明の前提であって、価値論の内部にいる限り議論の対象にはなりにくい。これに対して、明らかにベネッティはこの前提を問題にしているのであって、この意味でスミス価値論―より広く言えば価値論一般―における貨幣理論の解釈において従来とは非常に異なった新たなプロブレマティークを提起していると言えよう。⁽¹³⁾

Ⅲ. 若干のインプリケーション

世界的レベルにある日本のスミス研究からすれば、本書はかなり乱暴なスミス解釈の書と見えるであろう。しかし、それにもかかわらず、本書は次のような意義を有すると思われる。

戦前からのスミス研究の膨大な蓄積を有している日本において、マルクス経済学サイドの主たる研究軸は「市民社会」論としてのスミス理論の読解に置かれてきたと言って良いであろう。このため、日本のスミス研究は、①その力点は主として思想史的側面―近代および近代人の意味の解明―に置き、さらにこの点に関連して②スミス理論の経済理論的側面は、「資本主義」論の構築によってスミスを原理的に乗り越えたとされるマルクスの『剰余価値学説史』の問題構成―労働価値論・剰余価値論の完成史としての経済学説史研究―の枠内で

処理されているように思われる。つまり、マルクス価値論を究極の存在として前提にし、古典派経済学はそれに至る階梯として理論史的に位置づけられている。しかし、従来のマルクス価値論解釈、特にリカードウ的マルクス解釈が再検討されなければならないということは、従来のマルクス価値論解釈に基づいて構成されている経済学説史の読み直しが必要だということを意味する。スミスについて言うならば、スミスの中に「投下労働」価値論を見ようとする見解は、それがリカードウによって示唆されたものであるという事実からも判るように、⁽¹⁴⁾リカードウ的マルクス解釈の延長線上にある。そうであれば、市場経済理論としての価値論解釈は、マルクス価値論を従来の均衡価格水準決定論のような狭い枠組みから解放したように、スミス経済理論研究をも従来の研究枠組みから解放し、スミス独自の市場経済における社会編成様式論—「商業社会」論、価値論・貨幣論についてのスミスのプロブレマティッカーを明らかにする可能性を与えてくれると思われる。この点で、本書はスミスについての刺激的な読み直しの書であると言えよう。

(注)

- (1) ベネッティ〔2〕の「序文」参照。なお、commercial society の訳語を「商業的社会」ではなく「商業社会」とするのは、本文で見えるようにベネッティの言う *società mercantile* の概念内容が、「市民社会」の双対概念として理解される（小林〔9〕26頁）「独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会」（同〔8〕169頁）としての「商業的社会」概念とは根本的に異なっているからである。
- (2) このような学制的状況については、雨宮〔1〕を参照されたい。
- (3) この潮流に属する論者および論稿については、ブルイ〔16〕の註3を参照されたい。
- (4) 内田義彦氏も同様の主張をされている（〔15〕120頁）。
- (5) このように理解すれば、理論構築におけるその役割という点において、スミスの「商業社会」概念は、高須賀義博氏の言われる「単純流通」概念に対応すると考えられる。高須賀〔13〕参照。
- (6) 本稿では検討しえないが、ベネッティは、利潤の存在が与件とされていることに示されるように古典派経済学にとって資本は「限界概念（concetto—limite）」（〔2〕p. 123）であり、そのありうべき生成論を有していないとしている（この点については、カルトリエ〔4〕を参照されたい）。それ故に、スミスの経済理論は資本主義論ではなく、「商業社会の経済理論」だとされる。
- (7) 船越経三氏も、いわゆるスミスの「投下労働」価値論と「支配労働」価値論が、それぞれ「人間と自然との交換」と「人間と人間との交換」に対応するとさ

- されている（〔7〕第6章第2節）。
- (8) 日本では、岡田純一氏がこのような方向性を打ち出されている。岡田〔10〕を参照されたい。
- (9) ベネッティは、本書の第VI章の付録でこの収束プロセスの数学的定式化を行っている。この定式化を巡る議論については、*Cahiers d'économie politique*, No. 6, 1981 の C. Benetti, J. Cartelier, R. Arena および同誌 No. 8, 1982 の J. Cartelier の論稿を参照されたい。
- (10) スミス〔12〕p. 273 - 274 ② 256 頁, 参照。
- (11) 「あらゆる社会の年々の収入は、つねにその産業の年々の全生産物の交換価値と精確に等しい、否むしろこの交換価値と精確に同一物なのである」(スミス〔12〕p. 423 ③ 56 頁)。
- (12) この方向での精緻な研究としては、藤塚〔6〕と武田〔14〕を挙げることができる。
- (13) 後にベネッティは、〔3〕で価値論と貨幣との間のこの背反関係を一般的な形で問題にし、価値論批判=経済学批判として定式化している。これについては拙稿〔5〕を参照されたい。
- (14) リカードウ〔11〕第1章第1節。

参考文献

- 〔1〕 雨宮照雄「欧米における最近の価値論論争について—ネオ・リカードイアン」の『価値不要論』をめぐって』『三重法経』, 第57号, 1983
- 〔2〕 C. Benetti, *Smith; la Teoria Economica della Società Mercantile*, Etas Libri, Milano, 1979
- 〔3〕 ———, J. Cartelier, *Marchands, Salarial et Capitalistes*, PUF—Maspero, 1980
- 〔4〕 J. Cartelier, *Surproduit et Reproduction*, PUF—Maspero, 1976
- 〔5〕 海老塚明「貨幣と経済学批判」『一橋論叢』第91巻第5号, 1984
- 〔6〕 藤塚知義『増補版アダム・スミス革命』, 東京大学出版局, 1979
- 〔7〕 船越経三『アダム・スミスの世界』, 東洋経済新報社, 1973
- 〔8〕 小林昇「国富論体系の成立—アダム・スミスとジェイムズ・スチュアート—」『国富論研究(1)』小林昇経済学史著作集Ⅰ, 未来社, 1976
- 〔9〕 ———「イギリスにおける『市民社会』の理論」『国富論研究(2)』小林昇経済学史著作集Ⅱ, 未来社, 1976
- 〔10〕 岡田純一『アダム・スミス』経済学者と現代Ⅰ, 日本経済新聞社, 1977
- 〔11〕 D. Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation, The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by Sraffa, vol. I, Cambridge U. P., 1951, 堀経夫訳『デイヴィッド・リカード全集』, 第1巻, 雄松堂書店, 1972
- 〔12〕 A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, The Modern Library, New York, 1965, 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫, 1959

(丸印内の数字によって分冊番号を記す)

- [13] 高須賀義博「単純流通における所有と価値」『マルクス経済学研究』, 新評論
1979
- [14] 武田信照「アダム・スミスの貨幣論—貨幣形成論を中心に—」『価値形態と
貨幣—スミス・マルクス・ヒルファードィンガー—』, 梓出版社,
1982
- [15] 内田義彦『増補版経済学の生誕』, 未来社, 1962
- [16] M. de Vroey, On the Obsolescence of the Marxian Theory of Value;
a Critical Review, *Capital and Class*, No. 17, 1982
(筆者の住所: 〒165 中野区大和町4-19-1 シャトウ・ミノリ 103)